

2013 年度ドクター研究員研究活動実績報告書

ふり 氏 がな 名	きかい 酒井 けんじ 健治
(研究テーマ名) 日本古代都城における外交儀礼の研究	
(研究活動実績) <p>今年度は、『日本書紀』や中国史書を中心に、関連史料の収集と7世紀前半までにおける外交儀礼の分析を行った。以下の点が判明した。</p> <p>(1) 古代において外交使節との接見・饗応・贈答品のやり取りといった外交儀礼がおこなわれる場所は、王宮が主に置かれた大和・難波・筑紫の3か所に大別できる。6世紀以前の外交儀礼について、5世紀後半における雄略朝の呉使の例を検討した結果、王宮の周辺に存在する「原」・「野」に使節を安置し、饗応を行っていたこと、大王の使者が使節への接待を行っていたことが判明した。この時点で王宮での外交儀礼は見られない。</p> <p>(2) 王宮での外交儀礼が史料上に見いだされるのは、推古16年の隋使が初めてと考えてよい。『日本書紀』推古紀、『隋書』には、小墾田宮における「使旨」・「信物」奏上がみられる。</p> <p>(3) 王宮での外交儀礼を可能とした条件として、豊浦宮から小墾田宮への遷宮が挙げられる。小墾田宮の構造は『日本書紀』推古紀・舒明天皇即位前紀からある程度推定でき、臣下が参加し公的な儀礼などを行う空間が存在したと考えられ、これが外交儀礼を可能にした。</p> <p>(4) しかし、隋使と推古が直接接見したかは史料上明らかではない。推古18年の新羅使に対しても同様の外交儀礼が行われるが、それ以降、文武朝に至るまで、王宮で外交儀礼が行われた様子はなく、推古朝の事例は、隋使来倭に際して取られた特別措置であったとみられる。</p> <p>(3) 6・7世紀において主に外交儀礼が行われたのは難波地域である。難波には港湾である難波津、使節の滞在場所である難波館、使節との饗宴を行ったと考えられる「難波大郡」が点在した。倭王権を支える有力豪族層が、外交儀礼を主催していたと考えられる。</p>	